

## 博物館構想検討ワーキンググループ

### ストックホルム市内の博物館視察

内田 青蔵

日本常民文化研究所の附設博物館設置構想の一環として、海外視察を行った。訪れたのは、スウェーデンのストックホルム。世界最初の野外博物館として知られるスカンセン野外博物館を始めに、ストックホルムにある著名な博物館である VASA 博物館・NORDISKA 博物館・海洋博物館・建築博物館・芸術博物館及び附属東洋館を 2 日間で訪ねた。

今回の視察は、博物館構想を現実化するための基本資料収集のために、昨年から行っていた国内の博物館視察を海外の著名な博物館の視察へと発展させたものである。視察先をスカンセン野外博物館に定めたのは、創設者の民俗学者であるアッター・ハセリオス氏がスウェーデンの近代化の中で消え失せようとする伝統的な庶民の生活と住まいである民家の実物の保護と保存のために創設した世界最初の野外博物館であるためである。そしてまた、本学が引き継いだこの日本常民文化研究所を創設した渋沢敬三も訪れたことのある博物館でもあり、渋沢の経験を追体験し、博物館構想に渋沢の求めていた精神性を反映したいという強い思いもあったからである。ちなみに、渋沢敬三は、大正 11（1922）年に横浜正金銀行ロンドン支店勤務となって、ロンドン生活が始まるが、その滞在中の大正 13（1924）年に北欧のオスロやストックホルムを廻り、野外博物館を訪ね、その存在を高く評価していたのである（横浜市歴史博物館『屋根裏の博物館——実業家渋沢敬三が育てた民の学問——』2002 年）。

スカンセン野外博物館（写真 1）の学芸員の案内で、主要な建物を廻り、その解説を受けた。その中のひとつの民家である Mora Farmstead（写真 2、3）は、およそ 300 年前の建物で、スカンセン野外博物館に最初に移築された農家であるという。渋沢の訪ねた際にも既に存在していた建物を前に、渋沢がどのような思いで見っていたのかが気になった。

このスカンセン野外博物館の特徴のひとつは、単に古い建物を移築して展示して見せるというこ



写真 1 スカンセン野外博物館の入口周辺部



写真 2 Mora Farmstead 正面の建物が主屋

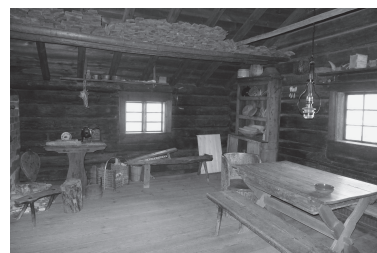


写真 3 Mora Farmstead 主屋の内部



写真4 VASA 博物館外観



写真5 VASA 博物館内部



写真6 NORDISKA 博物館外観

とだけの野外博物館ではなく、その展示された建物の時代の暮らしを生きたかたちで再現し、見学者にその時代と暮らしを体験させることを実践していることである。そのため、建物の内・外部は一見すると見学者用に綺麗に整理されていないようにも見えるし、内部に入ると展示の解説板もない。あるのは雑然と置かれた家具や衣服、あるいは、道具などのモノである。しかし、その意味は、まさしくかつての時代に行われていた生活の一断面が、そのまま展示されているのであり、それゆえ、生きた生活の場に通されたような雰囲気漂っているのだ。当然ながら、現代に生きるわれわれ見学者が見ても、“これは何だろう？”と思うような理解できない展示物もある。そのため、そこには、モノと同様にその時代に生きたかのような解説者もいて、窯に火をつけながら、当時の生活を再現し、いろいろ解説してくれる。そして、その人の服装もまた、その再現された時代のものなのである。その意味では、展示されたモノがすべて必要不可欠なものであり、すべてが有機的関係を持ちながら“暮らし”を伝えているのである。想像以上に見事な展示であり、大変な刺激を受けた。



写真7 NORDISKA 博物館の内部展示・1940年代の集合住宅の台所。日本の戦後の住宅公団のDKと変わらない台所空間であった

スカンセン野外博物館を後にし、午後は、VASA 博物館と NORDISKA 博物館を訪ねた。VASA 博物館は、ストックホルムにある国立の博物館でもっとも外国人客の集客力の高い博物館であるという。17世紀の巨大な帆船を引き揚げ、展示しているその空間は誠に迫力のあるもので、そうした実物の魅力の力を発揮した博物館であった（写真4、5）。

NORDISKA 博物館は、北欧に住む一般大衆の生活文化に係る博物館で、威厳を感じさせる建物の外観と比べると、展示は極めて庶民的なものといえ、そのギャップが興味深かった。例えば、1階には1940年代の一般市民の暮らす集合住宅の一住戸の実物大の展示室があるなど、日本の戦後の住宅公団の一住戸の展示を連想させるような展示が見られた（写真6、7）。また、NORDISKA 博物館では、子供を含む若い世代の家族を見学者として重視しているとし、子供の遊び場なども博物館内部に用意するなど、様々な工夫が見られた。それは、まさしく博物館を単なる使われなくなった古いモノの展示場から“現代生活を、過去を通して見直す場”として現代社会に定着させようとするための工夫のように感じられた。

いずれにせよ、極めて短時間の視察であったが、展示の方法や運営のシステムなどとともにいろいろ本学の博物館構想の際に参考にすべきことを多く学ぶことができた有意義なひと時であった。今後は、視察で得た成果を反映させながら、改めて“常民”の暮らしや生活を多くの人々が学べるための博物館の構想をまとめたいと考えている。